

かしよばんきん あた 家書万金に抵る - 文字がうれしい

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問 教育アドバイザー
張江 幸男

滞在期間の長短にかかわらず、海外に住む子ども達への日本語の教育は保護者にとって大きな問題です。このコラムでは、海外・帰国子女教育の大ベテランが「海外での日本語教育」へのアドバイスを語ります。

【1】文字がうれしい

唐の時代の詩人杜甫（とほ）の「春望」という詩の中に「家書万金に抵る」というフレーズがある。国が乱れた時代、都から遠く離れた杜甫が、家族から来た手紙を何万もの財宝に匹敵すると詠んでいる。台北に駐在したとき、当時、大学生だった娘から届く手紙は、まさに此の詩のような想いがしたものである。

最近は何のせいか、手紙に限らず文字に接すると格別な思いがする。昨晚、わたしの誕生日を祝って家族全員の食事が開かれた。娘夫婦が教員なものであるから此の時期の話題は、新しい学年のことが語られる。今年は孫が、中学と、大学にそれぞれ進んだものだから、ことさら学校のことで話題は盛り上がった。祝い酒に少々、酩酊して我が家にひきあげてきた。お茶を飲みながら孫からのカードを読む。

「おじいちゃん、お誕生日おめでとうございます。いつもお習字や基礎英語などを教えてくださって有難うございます。これからも、いろんなことを教えてください。」毎週、土曜日には習字を教えている。上の孫から始めたので、もう12年目になる。基礎英語は私の頭の体操と考えて、昨年の4月から始めた。6年生の孫も参加して一緒に聞いているが、4月から2年目に入った。此の二人の孫の文字もそれぞれ個性的である。短い文でも嬉しいものだ。毎日言葉を交わしているのに、文字で書かれたものに何故こうも、感慨深いものになるのだろうか。

ともあれ、日本とかけ離れた海外から送られてくる文はまさに万金ものなのだ。台北、NYより送った私の家族新聞の話は、いまでも親戚や友人に会うと格好の話題とされる。私自身も新聞綴りを時々ひもといて見る。記事だけでなくその記事の前後の事や、背景までがはっきりと蘇ってくる。

相談員の仕事をして20年になるが、この間、家族新聞作りを熱心に勧めてきた。外国に住めば、子どもは否応なしに日本語を忘れていく。だから親は意識して子どもたちに、本を読むことと、書く機会を作ってやらなければならない。読書と書くことで、日本語の記憶を回復し、定着させていく。社員か

らの後日談で、家族新聞を書き続けた子どもたちは、例外なく文章を書く楽しさがわかり、一つの生き甲斐にまでなると報告してくれた。手許にある家族新聞を読み比べてみると、幾つかのタイプにわけられる。

【2】家族新聞から

〔1〕新しい発見・・・海外赴任で住み着いたところでの、驚きの数々を報じている。

① 星の降る町～ゲレロ・ネグロ。

ここはメキシコのカリフォルニア半島の真ん中あたりで太平洋に面している。人口1万人でその半数が製塩事業の当社の関連した人々。

英語の分る人は当社の10家族のみ。あとはすべてスペイン語の世界。夜は満天の星が覆いかぶさってくるようだ。此の土地で3年生の拓君は。砂漠を走り、アザラシを追い掛けた。夕食後、両親が先生となって、毎日30分間、日本語を教えた。帰国後、日本の学校で、少しも困らなかつたそうだ。エライネー、ご両親万歳！

② 車の洪水～サイゴンの交通事情

サイゴンには自転車、シクロが右端。バイクが真ん中。自動車は左端というルールはあるらしい。しかし、家族全員が乗っているバイク。これが我こそは先つとぶつとばす。ドケー、退け！とクラクションを鳴らしっぱなしの車。信号なんてないに等しい交通事情。西岡さんはそのオドロキを報じている。

③ 子どもが働いている

貧富の差がはげしい～インドネシアのジャカルタに住んだ「めぐみ」さんが驚いたのは、インドネシアの人たちがとても歌が好きなことと、子どもが働いていることでした。一日の仕事が終わると、門番の人がギターを弾き、お手伝いさんと一緒になって歌を歌う。「めぐみ」さんも、〔ハロー・ハロー、バンドン〕は直ぐにおぼえた。インドネシアは豊かな人と貧しい人との差がとても大きい。町に出ると、働いている少年、少女の姿が、すぐに眼に入ってくる。道路で新聞を売る少年。雨の日には傘をさしかけて来て、お金をせびる少年少女。市場ではにんに